

神野藤昭夫
関根賢司 編

新編 伊勢物語

おうふう

神野藤昭夫
関根賢司 編

新編
伊勢
物語
語

おひふり

江苏工业学院图书馆
藏 书 章

編 者 略 歴

神野藤昭夫 (かんのとう あきお)
昭和18年生れ。早稲田大学大学院修了。
現職、跡見学園女子大学教授。

関根 賢司 (せきね けんじ)
昭和15年生れ。國學院大學大学院修了。
現職、樟蔭女子短期大学教授。

新編 伊勢物語

定価は表紙に表示してあります。

平成十一年一月十五日 初版印刷
平成十一年一月二十日 初版発行

編 者 神野藤昭夫
関根 賢司

発行者 田中 良和
株式会社 おうふう

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町二二一六

畑山第一ビル

電話 (〇三) 三二九五―八七七―

Printed in Japan

印刷 富士リプロ株式会社 製本 蒼洋社製本株式会社

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、発行所・お買い上げの書店にておとりかえします。

ISBN 4-273-03051-9 C3093

新編
伊勢物語
目次

凡例 6

伊勢物語（歌びとの行方） 藤井貞和 8

I 伊勢物語を読む

第一段	わかむらさき	18
第二段	春のもの	20
第三段	葎の宿	21
第四段	月やあらぬ	22
第五段	我が通ひ地	24
第六段	露とこたへて	25
第七段	かへる波	27
第八段	をちこち人	28
第九段	いざ言問はむ	29
第一〇段	たのむの雁	33
第一段	空行月	34
第二段	武藏野は	35
第三段	むさしあぶみ	36
第四段	都のつとに	37
第五段	人の心の奥	39
第六段	あまの羽衣	40
第七段	年にまれなる	42
第八段	くれなゐに	43

第一九段	風はやみ	44
第二〇段	うつろふ色	45
第二一段	ありしよりけに	46
第二二段	千夜を一夜に	49
第二三段	風吹けば	51
第二四段	梓弓	54
第二五段	あはで寝る夜	56
第二六段	もろこし船	57
第二七段	我許物思人	58
第二八段	あふごかたみ	59
第二九段	けふのこよひ	60
第三〇段	つらき心	61
第三一段	忘れ草	62
第三二段	しづのをだまき	63
第三三段	舟さす棹	64
第三四段	心ひとつに	65
第三五段	絶えての後	66
第三六段	玉かづら	67
第三七段	下紐解くな	68

第三八段	恋と言ふらむ	69
第三九段	とし消ち	70
第四〇段	ありしにまさる	72
第四一段	めもはるに	74
第四二段	誰が通ひ路	75
第四三段	しでの田長	76
第四四段	我さへもなく	77
第四五段	行く螢	78
第四六段	面影にたつ	80
第四七段	終に寄る瀬	81
第四八段	今ぞ知る	82
第四九段	若草	83
第五〇段	行く水	84
第五一段	秋なき時	86
第五二段	野に出でて	87
第五三段	鳥の鳴く	88
第五四段	天つ空なる露	89
第五五段	をりふしごとに	90
第五六段	露の宿り	91
第五七段	海人の刈る藻	92
第五八段	鬼のすだく	93
第五九段	櫂のしづく	95
第六〇段	五月待つ花橘	96

第六一段	たはれ島	97
第六二段	これやこの	98
第六三段	つくもがみ	100
第六四段	玉すだれ	102
第六五段	恋せじと	103
第六六段	うみわたる舟	106
第六七段	雲のたちまひ	107
第六八段	すみよしの浜	108
第六九段	夢かうつゝか	109
第七〇段	海人のつり舟	112
第七一段	神の斎垣	113
第七二段	うらみてのみ	114
第七三段	桂のごとき君	115
第七四段	恋ひわたる	116
第七五段	袖のしづく	117
第七六段	神世のこと	119
第七七段	春の別れ	120
第七八段	心を見せむ	121
第七九段	千尋あるかけ	123
第八〇段	春はいくかも	124
第八一段	塩竈に	125
第八二段	山のは逃げて	126
第八三段	雪踏み分けて	130

第八四段	さらぬ別れ	132
第八五段	雪のつもるぞ	133
第八六段	をのがさまへ	133
第八七段	海人の焚く火	134
第八八段	月をもめでじ	135
第八九段	いづれの神に	138
第九〇段	あな頼みがた	139
第九一段	春のかぎり	140
第九二段	棚なし小舟	141
第九三段	高き卑しき	142
第九四段	紅葉も花も	143
第九五段	隔つる関	144
第九六段	木の葉降りしく	145
第九七段	老いらく	146
第九八段	時しも分かぬ	148
第九九段	思ひのみこそ	149
第一〇〇段	こはしのぶなり	150
第一〇一段	藤のかげ	152
第一〇二段	世の憂きこと	153
第一〇三段	夢をはかなみ	155
第一〇四段	めくはせよ	156
第一〇五段	消なば消なむ	157
第一〇六段	ちはやぶる神世	158
第一〇七段	身を知る雨	159
第一〇八段	浪こそ岩	160
第一〇九段	人こそあだに	162
第一一〇段	魂結び	163
第一一一段	まだ見ぬ人	164
第一一二段	風をいたみ	165
第一一三段	短かき心	166
第一一四段	翁さび	167
第一一五段	都島べの別れ	168
第一一六段	はまびさし	169
第一一七段	岸の姫松	170
第一一八段	絶えぬ心	171
第一一九段	形見こそ	172
第二〇〇段	筑摩の祭	173
第二〇一段	花を縫ふ	174
第二〇二段	井手の玉水	175
第二〇三段	深草野	176
第二〇四段	思ふ事言はで	177
第二〇五段	終にゆく道	178
第二一〇段	終にゆく道	179

II 伊勢物語を学ぶ

- 1 写本を読む(第一、六段)
静嘉堂文庫蔵写本 184
- 2 真名本を読む(第六段)
旧本伊勢物語 194
- 3 古注を読む(第六段)
冷泉家流伊勢物語抄 196
- (a) 伊勢物語愚見抄 197
- (b) 伊勢物語山口記 198
- (c) 伊勢物語闕疑抄 199
- 4 新注を読む(第六段)
勢語臆断 201
- (a) 伊勢物語新釈 202
- 5 写本を読む(第二、三段)
書陵部蔵御所本 204
- 6 古活字本を読む(第六、九段)
鉄心斎文庫蔵嵯峨本 209
- 7 版本を読む(第八、三段)
跡見学園女子大図書館蔵版本 216
- 8 校本・校異を読む(第一、二、五段)
在原業平薨卒伝を読む 218
- 9 在原業平薨卒伝を読む 219
- 伊勢物語の書名伝承 184
- 歌語り用例資料 188
- 藤原高子年譜 190
- 藤原高子廃后記事 191
- 藤原高子自筆署名 191
- 異本伊勢物語絵巻(第六段) 192
- 古注・新注(翻刻・影印)一覽① 200
- 古注・新注(翻刻・影印)一覽② 202
- 伊勢物語絵巻(第二、三段) 205
- 古注・新注(翻刻・影印)一覽③ 205
- 伊勢物語図色紙(第二、三段) 206
- 伊勢物語と川柳 207
- 古注・新注(翻刻・影印)一覽④ 208
- 第六、九段と鶯鶯伝(会真記) 210
- 異本伊勢物語絵巻(第八、三段) 216
- 在原業平像 220

参考文献 221

凡 例

本書は、いつそう深く『伊勢物語』を読み、味わい、学ぶために、また、大学や短大における日本文学の講読や演習の教科書としても使用されることを念頭に、インターテキストチュアリティ（テキスト間テキスト性）という視点から、新たに編集したものである。『伊勢物語』というテキストを、他のさまざまな互に関連しあうテキスト群（『古今集』や『大和物語』『源氏物語』など）の網の目のなかに位置づけて考えてみよう、という試みである。

本書は、第一部と第二部から成る。第一部（Ⅰ 伊勢物語を読む）は、本文と脚注（関連本文など）を収める。脚注には、関連するテキスト群の本文、異文、表現などをなるべく多く掲げ、テキスト内部および他の歌物語や八代集などの関連を指摘することに努めたので、辞典や注釈書、研究書などによって知りうる語釈、解釈の揺れのたぐいは省略した。『伊勢物語』の本文は、定家本系統の武田本を用いることとして（一般に流布している天福本と大同小異で優劣つけがたいことについては「校異一覧」参照）、静嘉堂文庫蔵後柏原院宸筆本系統武田本を底本とした。翻刻の許可を与えられた静嘉堂文庫に深甚の謝意を表したい。なお、山田清市著『伊勢物語 校本と研究』（桜楓社、一九七七）および『伊勢物語 影印本付』（白帝社、一九六七。改訂、一九七八）を参考にすることができた。

本文は、底本を尊重して手を加えないことを原則としたが、通読の便を考えて、次のような方針に従って作成した。

- (1) 濁点、句読点、改行を施し、通行の章段に分って新たに章段名を付した。
- (2) 仮名は、通行の字体に改め、必要に応じて漢字を宛てたが、もとの仮名を読み仮名（振り仮名）の形で残した。
例、うゐかうぶり（底本）↓初冠^{うゐかうがり}（本書）
- (3) 漢字には、必要に応じて読み仮名を（ ）に入れて付した。例、十日許↓十日許^{（はかり）}
- (4) 仮名遣いは、底本のままとしたが、必要に応じて歴史的仮名遣いを（ ）に入れて傍記した。前記(2)の場合には省略した。例、おとこ↓おとこ、いゑ↓家^{いゑ}

(5) 反復記号は、底本のままとしたが、品詞の異なる部分にまで及んでいる場合や漢字を宛てた場合は、振り仮名として残した。例、しるよし、て↓しるよしして、かすがの、↓かすが野の、京は、なれ↓京は離れ

(6) 底本は、歌を二字下げ、二行書きにするが、時に二行目から地の文に続ける場合がある。本書は、二字下げ、二行書きとして、歌に続く地の文を改行して次の行とした。

脚注として掲げた関連本文は、歌は原則として『新編国歌大観』（角川書店）に拠り、物語・日記・紀行などの散文は、日本古典文学大系・新日本古典文学大系（岩波書店）、日本古典文学全集・新編日本古典文学全集（小学館）、日本古典全書（朝日新聞社）、新潮日本古典集成（新潮社）、岩波文庫、角川文庫など、一般に流通している本文に拠った。さらに、それらテキスト群それぞれの異本、異文が問題になることは言うまでもない。

第二部（Ⅱ 伊勢物語を学ぶ）は、各種の写本・版本の影印を収め、変体仮名に習熟する便をはかるとともに、古注・新注の一部を掲出し、さらに諸資料・図版・参考文献などを収めた。『伊勢物語』をより深く学ぶための端緒となるようにとの工夫からであるが、脚注とともども、すべてを網羅することはもとより不可能であった。

本書の作成にあたっては、静嘉堂文庫をはじめ、宮内庁書陵部・鉄心斎文庫・跡見学園女子大学図書館・東京国立博物館・陽明文庫・不退寺ほかの諸機関及び柳田忠則氏には、所蔵本の翻刻あるいは掲載の許可をいただいた。また、秋山虔・石田穰二・片桐洋一・竹岡正夫・山田清市氏らの著書からは、多大な学恩を蒙るとともに、その一部を利用していただいたことを明記し、あわせて深く感謝申し上げる。また、本書の編集、校正などに協力していただいた（株）おうふうの坂倉良一氏にも感謝の意を表したい。

本書は、藤井貞和を加えた三人で企画し討議して成立したが、藤井が具体的な作業の段階で参加できなかったために、二人の編著として、解説に代えて藤井の文章を収めることにした。

一九九八年十一月七日

神野藤昭夫
関根 賢司

伊勢物語（歌びとの行方）

藤井貞和

『伊勢物語』の時代、作者

『伊勢物語』の作者がだれであるかを、現在のところ、知ることはむずかしい。女か男かということも。しかし作者がいない、ということは考えにくい。

作者がいる、といってもそれは一人ではなからう、というのがほぼ一致した今日の意見になっている。以下のような作者ないしグループがこの物語の成立に、さまざまな時点で関与したろうと、人々はそれぞれの調査の結果を発表しつづけてきた。

- (1) 在原業平とその近親者（諸家）
 - (2) 源融を頂点とする文芸グループ（渡辺実）
 - (3) 二条后（藤原高子）とその周辺（諸家）
 - (4) 染殿の内侍（＝藤原朝臣直子か）（金田元彦）
 - (5) 七条后（＝藤原朝臣温子）の文芸サロン——伊勢御息所・女一宮（＝均子内親王）・絲所の別当・近衛の命婦等を含む（原國人）
 - (6) 紀貫之（諸家）
 - (7) 源順（原國人）
- みぎの(1)―(7)は原氏の書かれた「伊勢物語の成立と作者」（『一冊の講座 伊勢物語』有精堂一九八三年）、

『平安時代物語の研究』（新典社）所収）という論文に拠ってみた。まさか（1）（7）の全部が『伊勢物語』にかかわる、とは信じられないにしても、『伊勢物語』という作品が歳月をかけて、複数の場所で、複数の人のかかりにより、この世にもたらされた、とはたしかに言われてよい。

（1）の業平関与説はほぼ否定されてよからう。『伊勢物語』は業平の和歌を利用してだれか別の人が作った作品だから、業平本人が関与した、という意見はなりたない。また近親者であったとしてかまわないにせよ、わざわざ近親者を作者に想定しなければならぬ理由がない。（7）もとよりあげるにはおよばないと思う。

（2）から（5）にかけては、宮廷や貴族の“サロン”やグループに成立の場所を見つけようとする意見としてそれぞれある。なるほど宮廷や貴族の“サロン”やグループの力が『伊勢物語』の原型を産みだした主要な要因であったかと、これは認めることにやぶさかでありたくない。しかし（2）（5）の全部が同時になりたつことはありえない。なぜなら、“サロン”やグループはたがいに競って独自の活動にあげられることを旨としているはずだから、『伊勢物語』を産みだしたグループをかりにAだとすると、Bグループは『伊勢物語』の成立に関与しているはずがない。Bグループは別の物語、たとえば『大和物語』を産んだということにならう。分かり易い理屈ではないか。

また、サロンという語は十七十八世紀西洋貴族社会の、歴史的限定を背負う概念のもとに本来あるべき性格のものだとすると、日本古代の宮廷社会の和歌や物語創作活動へそれを適用することは、ただ比喩的にのみ言い立てられることだから、濫用を避けるにこしたことはない。

（6）の紀貫之説は、一〇八段が貫之の歌を“女”の歌へ変えて出典不明の歌と組み合わせるといふ作られ方をした短い章段であったり、つづく一〇九段が貫之の父紀茂行（望行とも）の歌であったりすることからみちびかれた、一とおり耳を傾けるべき意見かと思う。

『伊勢物語』は、あとにも見るように、けっして自然発生状態であったり、編纂途上のまま投げだされたりというような代物でなく、作品をつらぬく統一した性格をつよく感じさせられるからには、以上のような作者説を不可欠とする。

とともに、そこにいたるまでに一定の期間を要した作品生成、成長の歴史というものがあつたのだいたい推定されている。この時代や、それ以前から、歌語りということが行われていたと認めることが、有効な現状での仮説としてある。

意味ありげな和歌があればそれをめぐってお話を作ってみる、また、実際に、和歌がどんな事情から作られたのかを興味津々に語ってみせる、そんな歌語りが文学発生期からずっとあつて、『万葉集』にはそのたぐいの和歌の説話がたくさん見られた。平安時代にはいつても和歌は、貴族層であろうと、庶民たちであろうと、しきりに日々の話題にして、たとえば謎々に出したり、機知を感じしたりしていた。『伊勢物語』はそんな平安前期の、まだ作り物語なんかが発達しない時代の、慰み物として歌語りがもてはやされていたころに、もう仮名文字があつたから書く文学として、その歌語りを集成したり、歌語りめかして書かれたりしてできた。

すなわち『伊勢物語』は九世紀末か、十世紀のはじめかに、ほぼ「伊勢物語集」とでも名づけたらよい歌語り群として、多くの掌編が、行われたり、書かれたりしていたのを、編集する人があり、その編集する人もまたみずから「歌語り」を作ってみせたか、と知られる。

ただし、その歌語りが行われていた「サロン」あるいはグループはどこであつたか、その編集する人はだれか、そういうことになる、具体的に分からない。その編集する人が男だつたか、女だつたかと言うことも、あまり意味がないとともに、わからないのだからしょうがない。

作品が成立した時代、作者、成立の事情は以上で尽きてしまおう。

『伊勢物語』の男主人公

一〇二段を見ると、「むかし、をとこありけり」と始まり、「うたは詠まざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり」とあつて、『伊勢物語』の男主人公は、この一〇二段のかぎりで、歌人でないとされる。一〇一段なんかもそうで、「もとより歌のことは知りざりければ、すまひけれど（＝抵抗したことだが）、……」と、歌のことを知らない主人公に

なっている。

むろん別の多くの段での『伊勢物語』の男主人公からは、すぐれた歌人であるかのように読まれてきた。それまでの、『伊勢物語』は歌物語であるから、すぐれた歌人のエピソード集めであってこそその面目が立つのだとすると、下手な歌人や非歌人がどんどん出てきてはちよつと始末に困る。しかるに実情としては一〇一段や一〇二段のごとく、下手な歌人や非歌人がかなり出てくる。ここをどう考えることにしようか。

『伊勢物語』のなかの「むかし、を」と語りはじめられる男が、ある段では歌人であるはずなのに、別の段では下手な歌人であったり非歌人であったりする。そんな、段ごとに「むかし、を」との書き方がちがうという現象は、歌人か否かという区別にかぎらないので、同じことが『伊勢物語』の男主人公の性格、身分、年齢、階層、出身地、そして旅行先などにわたり、いくとも見られる。

物語の主人公は一般に色好みだと言われる。五八段や六一段などに、「心つきて色好みなる男」あるいは「これは色好むといふすき者」とあって、『伊勢物語』のある段で主人公が色好みであることはまちがいない。しかし色好みであるのはこうしたかぎられた段においてだけの現象だ。

一一九段では「あだなるを」とあって、これは色好み的一类かもしれないが、一〇三段に見ると「あだなる心なかりけり」とあって、あだであるかあだでないかに関し、正反対のことが言われている。一〇三段に即してみれば、色好みであることは否定される、と見るのがよく、そこに「ためにじちよう（＝実用）」だとなるのが性格をあらわす。二段では「……それをかのため男、うち物語らひて」と、「ため男」とあるとまでされる。

身分はどうか。一〇七段では「あてなる（＝高貴な）を」と、八九段では「いやしからぬを」と、八段では「身はいやしなから」、八一段ではぐつと落ちて「そこにありけるかたゐおきな（＝乞食翁）」。

年齢、身分はどうか。都会派の貴族かと思えば、「田舎わたらひしける人」（二三段）の子であったり、田舎びとそのものであったり、「うひかうぶり」（二段）する若い男で「わかきをとこ」（四〇段）とある通りだと思うと、「いと若きにはあらぬ」（八八段）ともあり、七七段あたりは「おきな（＝翁）」となつて何度も出てくる。つまり老人でも

ある、という次第。

さらには東国に行ったり、住みついたり、もともと東国人だったり、九州にでかけて行ったり、伊勢に行ったり。ようするに一段一段、別の「むかし、を」とこ」を設けて、一本調子にならないように語り分け、書き分けされている。たぶんその語り分け、書き分けにはそんなに苦心をはらっていない。今度は相手の女（あるいは男）を二人にしてみよう」とか、「相手を老女にしてみよう」とか、じつにさまざまな書き分け、語り分けを試みるその気分は、どちらかと言えば軽くて、ふわっと当たりのようなものを探る感じではつと決めてさつと書く、語る。

ただしその決めて設ける凝縮した一瞬の気分を支配する何物か、物語を産む力のようなその何物かは、けっしてよい加減であつたり、思い付き、軽はずみ、でたためなものであつたりしない、と言っておきたい。

『伊勢物語』の方法

(A) 住みわびぬ。今は限りと、山里に身を隠すべき宿 求めてむ

(B) 我が上に露ぞ置くなる。天の川。とわたる舟の櫂のしづくか

五九段

(A) 歌は『後撰和歌集』に、業平の歌としてあり、(B) 歌は『古今和歌集』に作者不明歌としてある。むろん「後撰」や「古今」が出典である気遣いはないので、九世紀代あるいは十世紀代の最初にこれらの歌が知られていた、というだけでよい。あるグループで(A) 歌が話題になり、これについてひとつ「状況」を作りだしてみようではないか、ということになった。ある人が一気呵成にこんな「詞書」を書きつけた。歌のなかの「山」を東山に見立てるといふごく思いつきの状況作りがここにはある。

むかし、をとこ、京をいかゞ思ひけむ、東山に住まむと思ひ入りて、

住みわびぬ。今は限りと、山里に身を隠すべき宿 求めてむ

と、歌語りとしてはじつに最低に安易な場合だ。でも歌語りとは、まさにそういう一瞬の、あるいは数瞬の「芸」としてあるのではなからうか。このように和歌からできてくる際に、前文部分(Ⅱ「詞書」)の情報が、その和歌のなか

からだいたい出てくることを見ぬきたい。和歌の「住みわびぬ」から、「詞書」部分の「住まむ」や「京をいかゞ思ひけむ」が出てくる。「詞書」と和歌との情報量がほぼ等しくて、和歌から思いつかれたそれ（＝「詞書」）かなと見当がつく場合に、それが歌語りなのだ、ということが分かる。

つづく（B）歌を利用する後半は急速な展開を楽しめる。

かくて、物いたく病みて、死に入りたりければ、おもてに水そそきなどして、生きいでて、

我が上に露ぞ置くなる。天の川。とわたる舟の櫂のしづくか

となむいひて、生きいでたりける。

和歌には古来、謎々の要素があつたのではないかと思う。（B）歌を一種の謎々歌であると思ふことができないか。「わたしの上に露が置くと聞く」なかに。答え「天の川」。ううん、なるほど天の川の「とわたる舟の櫂のしづく」が私の袖のぬれる原因の露であるのか。和歌のおもしろさはそういう見立て、譬喩表現がいろいろに仕掛けられているのを、興味をそそる謎かけとして、解き明かすところにある。和歌形式の「大和言葉」と言えばかつてのこの国に行われていた言語遊戯の一種だが、歌語りの興味はそんな和歌のもつ謎かけをてこにして出てくる。

で、「伊勢物語」は終わりかというところ、さらなる逆転がある。そこに歌語りの歌語りたる本領がある。つまり「伊勢物語」は「我が上に露ぞ置くなる。天の川。とわたる舟の櫂のしづくか」という謎々を、「死にそんな病人にぶっかけられた水」と奇想天外に解き明かしてみせた。

みぎの意想を超える展開に「伊勢物語」の本性をみることは織田正吉氏の『日本のユーモア2 古典・説話篇』《筑摩書房、一九八七年》にもあって、「『伊勢物語』では付け加えられたフィクションによって「わが顔の上に」注がれた水になる」という織田氏の読みは正解だろう。特記しておきたい。

和歌は一面に「利用価値」としてある。

昔、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。やよひのつごもりに、その日、雨そはふるに、人のもとへ折りて奉らすとて、詠める

濡れつつぞしひて折りつる。年の内に春はいくかもあらじと思へば

八〇段

歌は『古今和歌集』にある業平の歌として知られるもの。詞書的な前文部分をうっかり読むと、業平らしき男が女のもとに歌をやった、というだけのように受けとれる。しかし「昔、おとろへたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり」とある「人」は女であろう。男なら「むかし、をどこ」でよいはずだから、「人」は女だと確信してよいとしたい。その女の家に「藤の花」を折って別の「人」へ奉る、と言うのだから、この「濡れつつぞしひて折りつる。年の内に春はいくかもあらじと思へば」は、業平のそれを利用して女の歌にしてみせたことになる。『伊勢物語』のなかに女から女へ贈る歌があつてもよいことではないか。むろん、そのことは、男と男との関係に置かれてもよく、また事實上、男性愛、女性愛の記号をもあわせ読むことが視野にあつてよい。

『伊勢物語』はそんな変幻自在の文学としてある。

むかし、恋しさに、来つつかへれど、女に消息をだにえせて、詠める

芦辺こぐ棚無し小舟　いくそたび行きかへるらん。知る人もなみ

九二段

こんなのも和歌を起点として「詞書」の「来つつかへれど」などが思いつかれた表現であるのにちがいない。

『伊勢物語』の方法、つづき

九六段、やや長い物語を見よう。

むかし、をとこありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。岩木にしあらねば、心苦しと思ひけむ、やうくあはれと思ひけり。そのころ、みなつきの望ばかりなりければ、女、身に瘡一つ二ついできにけり。……

(中略)

男の熱心な求愛にようよう傾く女の心。ありふれた、いかにも『伊勢物語』らしい書きだしであるように見えて、その女の膚^{はだえ}におできが一つ二つ。意外な展開になりそうではないか。和歌におできの出でくる理由が隠されているのではなからうか。歌語りならば和歌の持つ情報量を敷衍して散文がある、という読みの原則を生かして、その隠された